

近代における理想の「子ども」像

～巖谷小波の「一寸法師」の再話と「子ども観」の形成～

3年6組 31番 小柳 花音

I はじめに

明治の日本を代表する児童文学作家、巖谷小波は『御伽草子』を再話して『日本昔噺』を書いた。彼の再話した「桃太郎」や「浦島太郎」、「鶴の恩返し」など、親しみやすい物語は今なお語りつがれている。しかし巖谷の『日本昔噺』は、『御伽草子』を大きく改変しているところも多々見受けられ、その変更点には、学制をはじめとする明治政府の諸政策と密接に関係した「子どもはこうあるべき」という価値観が反映されている。そこで巖谷が改変した部分にあらわれている近代日本における理想の「子ども」像を、『御伽草子』と『日本昔噺』の『一寸法師』を比較しながら考察していくことにしたい。

本論文では、近代以前のいわゆる「小人」と近代における「子ども」の違い、および文学を通して「子ども」観が浸透していた背景を述べ（II章）、一寸法師が背たけを手に入れる場面までのそれぞれの『一寸法師』における違いを示し（III章）、一寸法師が背たけを手に入れた後の場面における相違点と近代日本の立身出世主義との関係を明らかにし（IV章）、最後に、『日本昔噺』の『一寸法師』に描かれた「子ども」像とその背景について考察する（V章）。

II 近代における「子ども」観の変化

フランスの歴史学者フィリップ・アリエスは自身の著書で、子どもに対する見方の変化を次のように述べている。

この社会（引用者注：「伝統的な古い社会」のこと）は「子ども」をはっきりと表象していないし、少年にかんしては、なおのことそうであると、私は論じた。子ども期に相当する期間は、「小さい大人」がひとりで自分の用を足すにはいたらない期間、最もか弱い状態で過す期間に切りつめられていた。だから身体的に大人と見做されるとすぐに、できる限り早い時期から子どもは大人たちと一緒にされ、仕事や遊びを共にしたのである¹。

「伝統的な古い社会」では子どもは「子ども」ではなく、「小さい大人」であり、私たちがイメージする「子ども」像は「社会の近代化のプロセスにおいて、近代家族と学校の長期的な発展のなかから徐々に生み出されていった」²のである。日本の「子ども」観も明治維新以降、「明治政府による急激な近代化政策のなかで、近代西欧の子ども観の影響を受けながらも、西欧とはやや異なったプロセスで誕生をみ」³た。近代化に向けて大きく動きだした社会の中で、学制は公布され、「無垢」で「努力を惜しまない」子どもこそが理想の子ども像となった。こうして、「近代国家を担う国民」⁴にするための「〈大人〉に教え導かれるべき」⁵子ども像が誕生したのである。

¹ フィリップ・アリエス（杉山光信、杉山恵美子 訳）『〈子ども〉の誕生』（みすず書房 1980年 p.1）

² 河原和枝 『子ども観の近代』（中公新書 1998年 p.7）

³ 河原前掲書 p.7

⁴ 河原前掲書 p.8

⁵ 河原前掲書 p.61

こうした学制などの制度は近代的な子ども観の形成に深く関係していたが、もう一つの契機として文学も大きな役割を果たした。河原和枝は文学と子ども観の形成について次のように述べている。

大人が子どもをどのように認知しているかを知るための格好の素材のひとつは、児童文学である。大人が子どものために書く児童文学は、子どもには子どもにふさわしい文学が必要であると大人が考えること、つまり大人と子どもの区別を前提としており、いろいろな意味でその社会の子ども観を如実に反映しているからである。と同時にまた、そこに描かれた<子ども>のイメージが、逆に社会に影響を与え、人びとの子ども観を変化させることもある⁶。

児童文学には大人が考える「子どもはこうあるべき」という理想の子どものイメージが表現されており、さらにはそれが当時の「一般の人びとの子ども観に大きな影響を及ぼし」⁷、また、近代以降の現代を生きる私たちにも受け継がれているのである。

では、近代の日本はどのような子どもを理想の「子ども」としたのだろうか。本論文では、巖谷小波が『御伽草子』の一寸法師をどのような価値観に基づいて再話したのか考察していきたい。

Ⅲ 打出の小槌で背たけを手に入れるまでの相違点

(1) 『御伽草子』と『日本昔噺』における一寸法師と宰相の姫君の関係性

巖谷小波の『一寸法師』は、『御伽草子』のそれと比較して、いくつかの変更がなされているが、ここでは前半部分である一寸法師が打出の小槌によって背たけを手に入れるまでの場面に注目し、巖谷の改変にどのような意味があるのかを考察していくことにしよう。

『御伽草子』において、一寸法師は、子のできないことを悲しんだ媼が住吉大明神に参詣し、お祈りしたことで生まれた子である。しかし、十二、三歳になっても背たけが一寸のまま人並みではなかったので、いつまでたっても成長しないことを嘆いた翁と媼に追い出されてしまう⁸。

生家を出た一寸法師は都に上ると、三条の宰相殿のもとに立ち寄り、宰相殿は一寸法師を「まことに愉快な者だ」とおっしゃって迎え入れた。

都に上り、ここやかしこと見る程に、(中略)、さて三条の宰相殿と申す人のもとに立ち寄りて、「物申さん」といひければ、(中略)、宰相殿御覧じて、げにおもしろき者なりとて、御笑ひなされけり⁹。

このように宰相に迎えられた一寸法師だが、宰相の姫君に対して以下のような思いを抱くことになる。

かくて、年月送る程に、一寸法師十六になり、せいはずのままなり。さる程に宰相殿に、十三にならせ給ふ姫君おはします。御かたちがすぐれ候へば、一寸法師姫君を見奉りしより、思ひとなり、いかにもして案をめぐらし、わが女房にせばや思ひ、(後略)。¹⁰

この場面からは、一寸法師が、「いかにもして案をめぐらし、わが女房にせばや思ひ」¹¹とあるように、

⁶ 河原前掲書 p.12

⁷ 河原前掲書 p.13

⁸ 大島建彦訳 『完訳 日本の古典 第四十九巻 御伽草子集』(小学館 1983年 p335-336)

⁹ 市古貞次校注 『御伽草子(下)』(岩波書店 1986年 p142-143)

¹⁰ 同前

¹¹ 同前

姫を手に入れるためならどんなことも辞さないほど強い恋情を募らせていたことがわかる。この後、一寸法師はある計略を実行に移し、姫君を手に入れることになる。

ある時みつもの¹²のうちまき¹³取り、茶袋に入れ、姫君が臥しておはしけるに、はかりごとをめぐらし、姫君の御口にぬり、さて茶袋ばかりを持ちて泣き居たり。宰相殿御覧じて、御尋ねありければ、「姫君の、童がこの程取り集めて置き候うちまきを、取らせ給ひ、御参り候」と申せば、宰相殿は大きに怒らせ給ひければ、(中略)、いかなも失ふべしとて、一寸法師に仰せつけらる¹⁴。

このように『御伽草子』では、一寸法師は策略をめぐらし、嘘をつくことで、姫を手に入れるという自らの目的を達成しているのである。

しかし、巖谷小波の『日本昔噺』では、『御伽草子』の一寸法師のようなずる賢さが何一つ見受けられなくなっている。

中にも宰相殿のお姫様は此の一寸法師が大のお気に入り、何処へお出でになるにも、此の小僧をお供になさいましたが、(中略)、お参詣にお出でになりました。¹⁵

このように、『日本昔噺』の一寸法師は姫を手に入れようと策略を巡らせる存在ではなく、姫の「お気に入り」としての役割を与えられており、姫に対して特別な感情を抱いているという描写が一切無い。そのため、巖谷版の一寸法師は、宰相に嘘をつく必要もなくなったのである。巖谷は、私欲のために嘘をつくという汚い側面を削除することで、体は小さくとも大人のような一寸法師ではなく、『日本昔噺』の一寸法師として、潔白さを強調し、これによって、『日本昔噺』の一寸法師は近代的な「清潔で上品な<子ども>像」¹⁶に沿った存在として生まれ変わったのである。

(2) 一寸法師と打出の小槌

『一寸法師』という物語が最も大きな盛り上がりを見せる場面のひとつは、やはり打出の小槌の力によって一寸法師の背が伸びる場面であろう。この物語のハイライトともいえる場面にも、巖谷は大きな改変を施している。

『御伽草子』において屋敷を追い出されてしまった姫君と、まんまと姫を手に入れた一寸法師は、難波の浦へ向かう途中、鬼が住む島へと流されてしまう。鬼は姫君をさらおうとするが、一寸法師の攻撃によって打出の小槌を落として退散していく。

鬼もおぢをののきて、(中略)、打出の小槌、杖、笞など、何にいたるまでうち捨てて、(中略)、やうやう逃げにけり。さて一寸法師は是を見て、まづ打出の小槌を濫妨(引用者注：あらすこと。掠奪すること。)し、「われわれがせいを大きになれ」とぞ、どうと打ち候へば、程なくせい大きになり、(後略)。¹⁷

¹² 貢物の意

¹³ 打撒。米の女房詞。神前に供える精米のこと。

¹⁴ 市古 前掲書 p143

¹⁵ 巖谷 前掲書 p290

¹⁶ 『國文學—解釈と教材の研究— 1985年 10月号』(學燈社 1985年 p69)

¹⁷ 市古 前掲書 p146

このように『御伽草子』の一寸法師は鬼が落としていった打出の小槌を「略奪して」、自分の背たけを手に入れていることがわかる。

ところが『日本昔噺』の一寸法師は『御伽草子』とは対照的な方法で背たけを獲得している。

初めの威勢は何処へやら、二匹とも一目算に逃げてしまひました。(中略)、丁度其処の路傍に、小槌が一個落ちて居りました。(中略)『よろしい、妾が今此の打出の小槌で、お前の丈を大きくしてあげやう。』¹⁸

どちらも鬼に襲われた姫君を守るため戦ったところ、鬼が打出の小槌を落としていくという流れだが、『御伽草子』の一寸法師が落ちて居た小槌を「奪い取って」、「自分で」背たけを打出しているのに対して、巖谷の一寸法師は、「濫妨」という語が消去され、「姫君に」「打出してもらっている」と改変されている点に注視したい。千葉俊二は近代の「子どもへのまなざしは一見近代的な児童観と見えながら、やがて子どもを“イノセンス”(無垢・無邪気)の真綿でくる」¹⁹むものであったと語っている。巖谷は策略や略奪によって自らの望みをかなえていた『御伽草子』の一寸法師＝「小さな大人」を、十八、九世紀の『子ども』を『無垢』²⁰ととらえる子ども観のもと、「姫君に気に入ってもらおう」、「背たけを与えてもらう」といった近代的な子どもへと作り変えたのである。

IV 一寸法師の出世

(1) 『御伽草子』と『日本昔噺』における一寸法師の出世

次に一寸法師が背たけを手に入れた後の展開に焦点をあてて考察していく。『御伽草子』、『日本昔噺』の一寸法師は、最終的に「堀河の少将」という地位にまで出世するが、二つの『一寸法師』には、その出世の過程で大きな差が生まれている。『御伽草子』の一寸法師は、奪った小槌で自分の背たけを打ち出した後、空腹を満たすために食糧を、また金銀財宝を打ち出している。

どうと打ち候へば、程なくせいが大きになり、さて此程疲れ(引用者注：疲弊。飢えの意。)にのぞみたることなれば、まづまづ飯を打ち出し、(中略)。

その後、金銀を打ち出し、姫君とともに都へ上り、(中略)、此事隠れなければ、(中略)、かやうに心(引用者注：素姓が高貴なだけでなく心も、の意。)いやしからざれば、殿上へ召され、堀河の少将になし給ふこそめでたけれ。²¹

この一寸法師は、打出の小槌で出した金銀が呼んだ都でのうわさが、帝と一寸法師を結びつけ、出世に至ったと読み取ることができる。しかし、この金銀は、一寸法師が鬼から「奪い取った」打出の小槌で打ち出したものであり、小槌同様に略奪することで得たものである。つまり、一寸法師は略奪することで、何ら努力せずに出世を果たしているといえる。

このように、『御伽草子』の一寸法師は何一つ努力せずに出世を果たしたが、対照的に『日本昔噺』の一寸法師は後ろ暗いことの無い、クリーンな出世を果たしている。

不思議にも一寸法師の体が、急にムクムクと大きくなつて、見て居る中に、立派な一人前の男に

¹⁸ 巖谷 前掲書 p294

¹⁹ 『國文學—解釈と教材の研究— 1985年 10月号』(學燈社 1985年 p85)

²⁰ 石原千秋・木股知史・小森陽一・島村輝・高橋修・高橋世織著 『読むための理論—文学・思想・批評』(世織書房 1991年 p271)

²¹ 市古 前掲書 p147

なりました。

(中略)、それから直にお帰りになるとお邸でも此話を聴いて、みんなが一寸法師の働きに感心し、(中略)、やがて宰相殿も不思議な事に思召して、此事を天子様へ申し上げますと、(中略)、これから一寸法師は体の大きくなつたように、身分も段々出世しまして後には堀河の少将と呼ばれ、多くの人に敬われましたとき。²²

巖谷は、『御伽草子』の一寸法師が打出の小槌による金銀のうわさで出世した、という箇所を「みんなが一寸法師の働きに感心し」と表現することで、一寸法師のはたらきが評価された結果が出世であるとしたのだ。

つまり、『日本昔噺』の一寸法師は、略奪によってではなく、姫君を鬼から守った「ご褒美」として、背たけを獲得し、また、その働きが認められたからこそ出世できたのである。

巖谷は、この場面においても、「略奪」という汚い部分を削除し、「頑張ったご褒美をもらう」と表現することで、「子供らしい、無垢な」一寸法師として表現したのである。

(2) 近代の「努力」と子ども観の形成との関係

巖谷は『日本昔噺』で一寸法師が「努力」の末に出世を果たすさまを描いたが、その背景には近代日本において「努力」が重要視されてきたことが大きく関係している。

日本四大財閥のひとつである安田財閥を一代で作り上げ、「銀行の神様」と呼ばれた安田善次郎は、自身の経験を記した著書のなかで、「練って待つものに果報あり」と題して以下のように述べている。

練るといふ事は即ち我々一生の間に甘苦に出逢ひて身心を鍛錬すをいふので、(中略)、悪戦苦闘して有らゆる経験を積み、誘惑の多い社会にあって、己れに克ち欲を制し、堅忍力行して出来たところの人を指して「練れた人」といふが、(中略)、自己を練るといふ事は何人にも欠くべからざる資本である。此資本なくして唯だ果報を待つたところが、決して其人の上に果報のくるものではないのである。²³

安田は、成功の機会とは常に努力を続けた人のもとにやってくるものであり、努力という資本無しではその機会にも恵まれることはないと言いたのである。このような、誘惑に打ち克ち、日々鍛錬を怠らない人にこそ果報が訪れるという考えは、明治時代初期の週刊投稿雑誌「穎才新誌」にもあらわれている。学制が定着した明治一〇年代初期、日本では「勉強立身熱」の時代が到来しており、「勉強ハ富貴を得ル資本ノ説」²⁴、「勉強ハ身ヲ立ルノ基トナル説」²⁵が当時の青少年に広く受け入れられていた。『「穎才新誌」に頻出する勉強という語は、もともと『骨折リテ勉ムルコト』つまりたゆみない努力を意味する言葉である」²⁶、その「意味が学習や学問に転化しても『骨折リテ勉ムルコト』の意味は依然として失われてはいない」²⁷。竹田洋はこうした当時の青少年たちや彼らを取り巻く環境を以下のように述べている。

「穎才新誌」の青少年たちは新しい時代（「文明開化」）を「俊才ヲ登用」とか「人才選挙ノ時」と

²² 巖谷 前掲書 p294

²³ 安田善次郎 『勤儉と貸殖』（東盛堂書店 1918年 p5）

²⁴ 『穎才新誌』（東京印刷会社 1879年 12月 15号）

²⁵ 同前

²⁶ 竹田洋 『立志・苦学・出世—受験生の社会史』（講談社 1991年 p44）

²⁷ 同前

して意識し、「今之世二生テ」「立志偉業」を成し遂げなければ、「傀ヂザル可ケンヤ」とまで述べている。勉強による上昇移動の機会が大きく開かれたとしている。²⁸

当時の青少年たちは勉学に励む＝「骨折リテ勉ムルコト」が新しい時代で出世していくために必要不可欠なものと位置づけ、勉強に対するモチベーションアップのための材料としたのである。巖谷は何の努力もせずに出世した『御伽草子』の一寸法師から、「努力こそが成功のためにもっとも大切なものである」という価値観をもとに、姫を救う＝「努力」した結果、地位を手に入れた一寸法師として生まれ変わらせたのである。

V 巖谷小波が目指した「一寸法師」

「小人」である『御伽草子』の一寸法師は、自らの望みをかなえることを最優先し、その目的のためならば、策略も略奪もためらうことは無い。米つぶを姫の口元につけて宰相に泣きつく場面は一寸法師のずる賢さを象徴している場面だといえるだろう。

しかし巖谷は、『日本昔噺』の一寸法師が策略や略奪行為に走るのではなく、無垢で純粋な心を持ち、姫君を鬼から守ったことで立派な一人前の男にまで成長し、地位を手に入れたように、「無垢な心で」、「たゆみなく努力し続ける」ことが、出世へのみちを拓くものであると表現した。このように、巖谷の再話した『一寸法師』は、現代の我々の無意識に深く根付いている、近代的な「子ども観」のなかで作られ、その子ども観をさらに広めていくという役割を果たしたといえるのである。

(6723 字 原稿用紙 16.8 枚相当)

【参考文献及び関連 URL】

- ◆石原千秋・木股知史・小森陽一・島村輝・高橋修・高橋世織『読むための理論—文学・思想・批評—』（世織書房 1991 年）
- ◆市古貞次『御伽草子（下）』（岩波書店 1986 年）
- ◆巖谷小波『日本昔噺』（平凡社 2001 年）
- ◆大島建彦『完訳 日本の古典 第四十九巻 御伽草子集』（小学館 1983 年）
- ◆河原和枝『子ども観の現代』（中公新書 1998 年）
- ◆竹田洋『立志・苦学・出世—受験生の社会史』（講談社現代新書 1991 年）
- ◆安田善次郎『勤儉と貸殖』（東盛堂書店 1918 年）
- ◆『穎才新誌 1879 年 12 月 15 号』（東京印刷会社 1879 年）
- ◆『國文學—解釈と教材の研究— 1985 年 10 月号』（學燈社 1985 年）

²⁸ 竹田前掲書 p38-39